

学部学生の興味・関心から見た対人社会心理学研究 の変遷：卒業研究のテーマ分析

その他のタイトル	The History of Research in Interpersonal Social Psychology from the Viewpoint of Undergraduate's Interests: A Theme Analysis of Graduation Thesis.
著者	高木 修, 田中 優, 小城 英子, 太田 仁, 阿部 晋吾, 牛田 好美
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	42
号	2
ページ	131-153
発行年	2011-02
URL	http://hdl.handle.net/10112/4926

学部学生の興味・関心から見た対人社会心理学研究の変遷
——卒業研究のテーマ分析——

高木修・田中優・小城英子・太田仁・阿部晋吾・牛田好美

The History of Research in Interpersonal Social Psychology
from the Viewpoint of Undergraduate's Interests:
A Theme Analysis of Graduation Thesis.

Osamu TAKAGI, Masashi TANAKA, Eiko KOSHIRO, Jin OHTA,
Shingo ABE and Yoshimi USHIDA

Abstract

The purpose of this paper is to categorize the themes of the graduation theses which were written by the students of a "social psychology on interpersonal relationships and behaviors" seminar, and to identify the history of research in interpersonal social psychology from the viewpoint of undergraduate's interests. This arrangement and analysis seems to be useful as a reference when undergraduates interested in interpersonal social psychology decide their themes of the graduation theses, and as a clue to know "fashion" of themes of interpersonal social psychology.

Key Words: Interpersonal Social Psychology, Graduation Thesis, Helping Behavior, Interpersonal Relationship, Aggressive Behavior, Self, Clothing Behavior, Mass Media and Sociocultural Phenomenon

抄 録

本稿は、「対人関係、対人行動の社会心理学的研究」ゼミナールの卒業論文のテーマを分類し、学部学生の研究関心の視点から、対人社会心理学研究の変遷を跡づけることを目的としている。このような論文テーマの整理と分析は、対人社会心理学に興味を持つ学部学生が卒業研究のテーマを決定する際の参考資料としても、また、対人社会心理学の研究テーマの「流行」を知る手掛かりとしても活用できると考える。

キーワード：対人社会心理学、卒業論文、援助行動、対人関係、攻撃行動、自己、被服行動、マスコミ・社会文化現象

はじめに

対人社会心理学のテーマは非常に多岐にわたり、日常生活の中での人間関係において生じる心理現象の全てが対人社会心理学のテーマになるといっても過言ではない。そのため、卒業研究のテーマや研究計画は、学生が日常的な疑問や自身の体験から生じたものを、心理学的な研究としてとらえなおし、これまでの先行研究の流れの中に位置づけ、新たな知見を生み出すことを試みる、というプロセスで進むことが多い。

では、実際に学生はどのようなテーマを選び、卒業研究を行っているのだろうか。本稿では、「対人関係、対人行動の社会心理学的研究」を指導する関西大学社会学部・高木修ゼミナール（以下、高木ゼミ）において、過去30数年にわたって提出された481編に及ぶ卒業論文を分析することで、その実態を捉える。また、学界における研究テーマのトレンドと関連づけながら、いくつかの代表的な卒業論文を、各テーマにおける研究全体の中に位置づけて紹介する。

卒業論文の集計

高木ゼミの1期生（昭和52年度卒）から31期生（平成21年度卒）までの卒業論文を集計した。総計は481編であり、複数名によって執筆されたものも含まれる。各期の平均論文数は15.52編（SD=5.86）である。卒業論文のタイトルをもとにテーマ分類を行った結果（図1）、援助行動が最も多く（74編）、次いで多いものとして、対人関係（72編）と攻撃行動

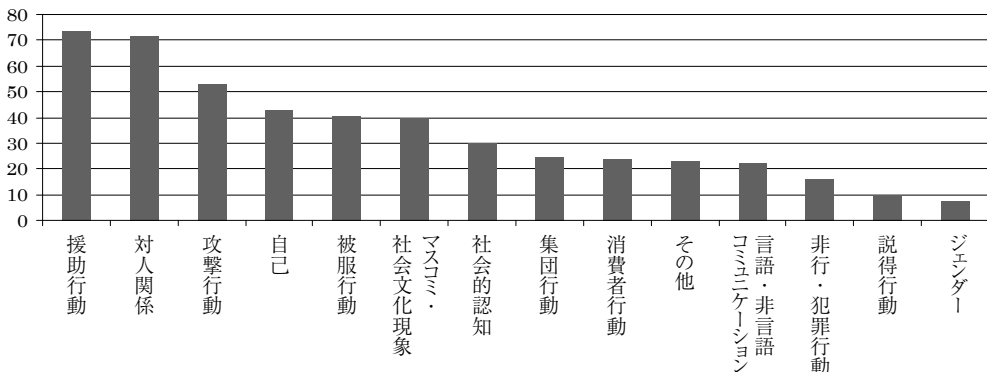


図1 各テーマの卒業論文数の単純集計

(53編) がある。

また、各研究テーマにおいて多く取り上げられた概念とそれらの概念を巡る卒業論文のタイトルを整理すると表1の通りとなる。

表1 各テーマに多く含まれる概念と代表的な卒論タイトルの一覧

テーマ	卒論題目に多く含まれる概念	卒論タイトルの一例
援助行動	援助行動、ソーシャルサポート	「援助成果経験が以後の援助要請行動に与える影響について」 「友人関係におけるソーシャル・サポートの互恵性と感情状態」
対人関係	社会的スキル、対人不安、孤独感	「友人関係の親密化に関する研究：初期相互作用と社会スキルが友人関係に及ぼす影響」 「社会的スキルの欠如と対人不安との関連について」
攻撃行動	攻撃行動、いじめ	「対人関係と原因情報が欲求不満事態での怒りと攻撃行動に及ぼす影響」 「いじめ・いじめられ経験の有無がいじめの各役割への人格評定に及ぼす影響：中学生を対象とした調査研究」
自己	自尊感情、自己高揚・自己卑下、自己開示	「自己概念のズレ及び自尊感情が対人恐怖心性に及ぼす影響：現実自己と理想自己・社会的自己・他者理想自己のズレから」 「新しい精神的健康観について：ポジティブ・イリュージョンの高低と自己分析の有無が精神的関係に与える影響」
被服行動	被服行動、化粧行動	「被服行動における社会的スキルと印象管理についての研究：着装を規定するACTとネットワーク調整スキル」 「化粧条件の差異による印象変化とそれに及ぼす回答者の自己評価・化粧度・化粧意識の影響」
マスコミ・社会文化現象	流行、ファン心理	「流行における採用者カテゴリーのパーソナリティ特性」 「ファン心理のメカニズム：ファン心理の構造と、ファン行動との関連の研究」
社会的認知	ステレオタイプ、対人魅力、原因帰属	「性役割意識が美人ステレオタイプに及ぼす影響の研究：性役割意識の葛藤との関連から」 「印象形成における身体的魅力と言語情報、
集団行動	リーダーシップ、内集団びいき、同調	「大学のラグビーチームにおけるリーダーシップの機能的役割の分担について」 「黒い羊と内集団びいきについて：外的評価による影響」
消費者行動	広告、購買意思決定	「関与がリスクコミュニケーションを含む広告の評価に及ぼす影響」 「ディスカウントに伴う商品購買意欲の変動について」
その他	スポーツ、発達、産業組織、学校、臨床	「地震災害における防災行動の生起過程の構造と影響を与える要因の検討」 「がん患者の家族の心的過程に関する定性研究：悲嘆・予期悲嘆に影響を与える要因の検討」
言語・非言語コミュニケーション	視線、表情、空間、CMC	「座席選択行動とシャイネスの関係」 「身体接触に関する初期的研究：身体接触の構造に着目した検討」
非行・犯罪行動	万引き、問題行動	「万引きについて：万引きに対する態度と万引き行為を規定する要因」 「問題行動における実行理由・抑制理由による問題行動の特徴づけと背景的要因の関連性について」
説得行動	心理的リアクタンス、精緻化可能性モデル	「ディスクレパンシーの程度と自我関与度が心理的リアクタンスに及ぼす効果と、意見変容に及ぼす効果について」 「若者の政治に対する態度変容について：精緻化可能性モデル（ELM）からの検証」
ジェンダー	シンデレラ・コンプレックス、性役割	「女性の自我同一性地位および性役割意識とシンデレラ・コンプレックス」 「体育会クラブにおける目的意識と役割選択：ジェンダー・タイプとの関連性の検討」

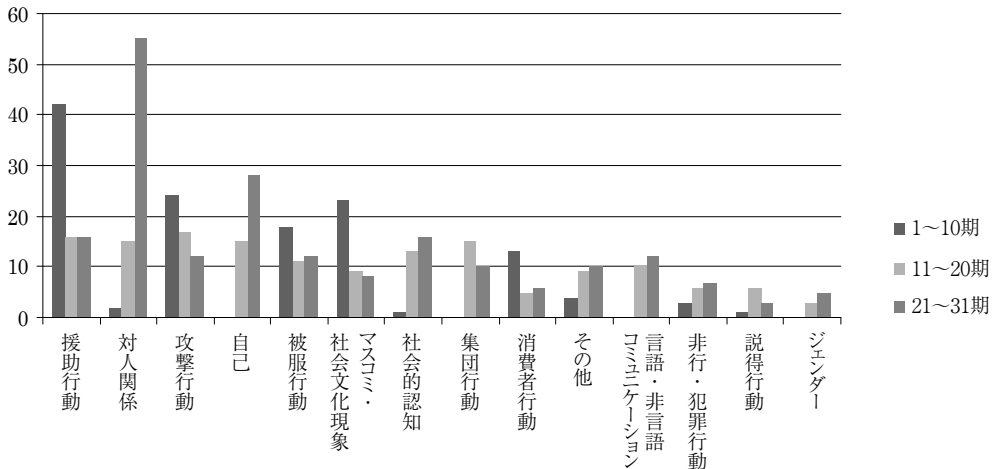


図2 各テーマの卒業論文数の期別クロス集計

さらに、研究テーマの推移を、10期を単位にして（21期～31期のみ11期）捉えるためにクロス集計を行った。その結果、図2のように、援助行動、攻撃行動、被服行動といったテーマは年代を経るごとに少なくなってきたおり、反対に、対人関係、自己といったテーマが、特に近年増えてきており、「その他」も含めて、卒業論文のテーマがますます多彩になってきていることがうかがえる。

では次に、論文数で上位に入った6つのテーマ（援助行動、対人行動、攻撃行動、自己、被服行動、マスコミ・社会文化現象）別に、学界における各テーマに関する研究の流れを跡づけた上で、その中に代表的な卒業論文を位置づけ、その学術的、実社会的意義を紹介することにする。

援助行動

援助行動に関する研究は、1964年のKitty Genovese 嬢殺害事件を契機に、どのような時に、どのような人が、人を「助ける」、あるいは、「助けない」のかという、援助者についての研究から始まった。その後、1990年代後半までの援助行動研究は、大きく4つの領域、すなわち、「援助行動の類型化と意思決定過程モデルの提案」、「援助行動の習得と発達の過程の解明」、「援助行動の生起を規定する要因の究明」、そして「援助研究と現実的な社会的援助問題との関わりの追求」に整理することができる（高木、1998）。さらに、今後の援助行動研究の課題としては、援助行動の認知的、感情的影響の潜在的な相互関連のより詳細

な解明に加えて、長期的、非衝動的な援助、親しい対人関係における援助、制度上の援助などに関する研究が必要であり、「いつ、なぜ人は助けるのか」から、どのような援助効果を期待して計画的、長期的、組織的に援助行動を行うかの動機づけの解明に向けた研究が行われている。

ここでは、長期的な援助行動の動機づけに関する26期生の日野（2005）と、親しい対人関係における援助要請に関する17期生の吉岡（1994）の卒業論文を紹介する。

長期的な援助行動の動機づけに関する研究について、高木（1997）は、援助行動を援助要請、援助授与、援助受容、援助（者）への反応という一連の行動文脈の中で捉え、その生起を規定する要因を援助者と被援助者の両立場から解明する必要性を指摘している。特に、援助行動の効果を、援助行動が被援助者に与える「援助効果」と、援助行動が援助者自身に与える「援助成果」に区別して概念化している。そして、妹尾・高木（2001）は、援助成果を“向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬”と定義し、他者援助は条件次第で助けた人自身の幸福感と結びつき、また、将来の援助授与、あるいは、援助要請を促進するなど、援助者自身にも肯定的な効果を及ぼすことを明らかにしている。

これらの研究知見を受けて、日野（2005）は、長期的な援助の授受、すなわち、先行する援助行動の援助者と被援助者が、その後、両者の立場が入れ替わった場合（被援助者と援助者）の援助行動に注目し、先行する援助行動から援助成果を得た経験が、その後の援助要請への動機づけに与える影響について検討した。そのために、援助成果に影響を及ぼす個人差要因と状況要因のダイナミクスを、実験的手法を用いて詳細に検討している。具体的には、状況要因として援助コストと援助効果を、個人差要因として援助成果志向性を取り上げ、これらの要因が、援助成果をいかに規定するかに関して以下の7つの仮説を設定した。すなわち、仮説1) 援助コストが大きい援助をした人の方が、援助コストが小さい援助をした人よりも、得られる援助成果は一層大きいだろう。仮説2) 援助効果が大きい援助をした人の方が、援助効果が小さい援助をした人よりも、得られる援助成果は一層大きいだろう。仮説3) 援助コストが大きく、援助効果も大きい援助をした人が、最も大きい援助成果を得るだろう。仮説4) 援助成果志向性が高い人ほど、得られる援助成果は一層大きいだろう。仮説5) 援助コストが小さい援助においても、援助成果志向性が高い人は、援助成果を得るだろう。仮説6) 援助効果が小さい援助においても、援助成果志向性が高い人は、援助成果を得るだろう。仮説7) 援助成果が大きいほど、a) 援助を要請すること（一般的援助要請）に対する動機づけ、b) 以前、援助した人に援助を要請するこ

と（返報的援助要請）に対する動機づけは高くなるだろう。

まず、因子分析の結果、援助成果が、短期的に経験される「感情的・精神的充実成果」と、援助を通じた自己の成長などの長期的な影響である「自己変革成果」から成ることを明らかにした。そして、2つのいずれの援助成果についても、援助コストが大きい援助ほど、援助効果が大きい援助ほど、援助成果志向性が高い人ほど、一層大きい援助成果を得ることが明らかとなり、仮説1、2、4は支持された。一方、援助効果が大きい援助では、援助コストが大きいほど、「感情的・精神的充実成果」が一層得られていた。しかし、援助効果が小さい援助では、援助コストの大小にかかわらず、得られる「感情的・精神的成果」の程度に差はなかった。さらに、援助効果や援助コストの大小にかかわらず、得られる「自己変革成果」の程度に差はなかった。これらの結果から、仮説3は部分的に支持された。さらに、援助成果志向性と援助コストおよび援助効果との交互作用効果は認められず、仮説5、6は支持されなかった。最後に、得られる「感情的・精神的充実成果」の程度によって、援助要請に対する動機づけに差はみられなかったが、「自己変革成果」が大きい人は、小さい人よりも、返報的援助要請だけでなく一般的援助要請に対しても動機づけが一層高いことが明らかになり、仮説7は概ね支持された。すなわち、長期的な視点からの援助要請に及ぼす援助成果の影響が、短期的に経験される感情や精神的な援助成果と、援助を通じた自己の成長などの長期的な影響である援助成果とで、異なることを明らかにした。

つぎに、親しい対人関係における援助要請に関する吉岡（1994）の卒業論文では、悩みの相談場面における相談相手の選択過程について検討している。すなわち、「悩みの相談」場面における、①悩みの認知から、他者への相談の意思決定までの過程、②相談相手の選択とその理由（選択条件）、そして、③主な相談相手に対して相談者が抱く役割期待について、半構造化面接法を用いて、大学生27名（男性11名、女性16名）を対象に調査を実施した。吉岡は、相談の意思決定過程を、ある事態において生じた不快感情を「悩み」であると判断するまでの「悩みの認知段階」、悩みを自分で解決しようと努力する「悩みの自己解決段階」、そして、相談という方法を思いついてから実際に相談を実行するまでの「相談意思決定段階」の3段階に整理した。そして、「悩みの自己解決段階」に関する質問に対して、調査対象者の多くは即答する傾向にあったが、「相談意思決定段階」に関する質問に対しては考え込む傾向にあったことから、相談を意思決定する段階における意思決定の複雑さを指摘している。また、相談相手の選択理由は、悩みの原因や不快感情の解消・低減、相談相手との親密さの維持・増加、自己の社会的妥当性を確認するなど、何らかの意図・目的を持って相談相手を選択する「意図的選択動機」と、その場の状況や規範、相手のパ

パーソナリティや特徴に規定されて相談相手を選択する「非意図的／他者・状況依存的選択動機」とに二分され、女性は「意図的選択動機」により、男性は「非意図的／他者・状況依存的選択動機」により、それぞれ相談相手を選択する傾向があるとしている。さらに、相談しない理由として、感情的な理由（負けたくない、恥ずかしい、口出して欲しくないなど）があること、また、これらの理由には明確な性差が認められないこと、援助要請の抑制に種々の問題があることにも言及している。

援助行動にテーマ分類された卒業論文は、高木ゼミの卒業論文481編中、最も多い74編である。また、取り扱うテーマを概観すれば、これまで国内外で行われている援助行動研究のテーマを幅広く網羅している。また、卒業論文が作成された時期からすれば、非常に先駆的な視点で作成された論文の多いことが指摘できよう。

対人関係

対人関係の研究は、対人関係の「形成過程」に焦点をあてた基礎的研究と、対人関係による個人への「影響」を扱う臨床的研究に大別することができる。したがって、この領域の研究で扱われる変数や概念は多岐にわたる。その中でも社会的スキルはこの両者を視野にいたした研究概念として、その適用は社会心理学領域のみならず、臨床心理学、発達心理学、教育心理学、産業心理学領域と広範囲にわたる。ここでは特に、対人関係領域に関する研究のうち、社会的スキルを表題に含み、主な変数として検討している卒業論文から、「形成過程」に関する1編と、「影響」に関する1編を紹介する。

対人関係の形成過程は、親密化の過程として捉えられ、その基礎理論の一つに、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論に代表される段階的発展理論がある。この理論では、親密化の過程における対人的交換に、内容の領域に関する「広さ」と、親密性の階層に関する「深さ」の2次元を想定している。対人関係の進展に伴い、狭く表層的な相互作用から、広く親密な相互作用へと、段階的・系統的な進行を仮定する理論である。

また、Murstein (1970) のSVR理論は、第一の段階では相手の表層的な刺激 (Stimulus) として、近接性・容貌・行動が重視される段階があり、その後の第二の段階では、両者の価値観 (Value) の類似や共有を重視する段階を経て、お互いの役割 (Role) を認知し、相補的な関係により行動することを重視する段階に至るとしている。

Kerckhoff & Davis (1962) のフィルタリングモデルでは、関係性の存続において、互いの価値観や欲求の相互適合性を重視する。対人関係の初期段階においては、お互いの外見や、社会的地位などの情報により適合性を判断し、その後の相互作用を通じて、相手の態

度や価値観の類似による適合性の判断が適時になされ、フィルタリング（ふるい分け）される過程を示すモデルである。

これら対人関係の発展モデルでは、関係の進展に伴い、表層的で狭小な相互作用から、より広範で深層に及ぶ相互作用へと発展するに従い親密化の指標として自己開示の量が増えることも仮定している。Taylor (1968) の男子大学生のルームメートを対象とした研究においても、時間の経過に伴い、相互の自己開示の量が増大することが報告されている。

これらの理論が、時間的経過が親密化を規定する要因であるとしているのに対して、Berg (1984)、Hays (1984, 1985)、Berg & Clark (1986) は、親密化は、段階的発展過程によるものではなく、その関係性の形成初期において決定されるという、初期分化現象 (early differentiation of relatedness) を提唱している。すなわち、出会いからの初期の対人的相互作用の様態が、以後の相互作用のスタイルを決定し、関係の発展から崩壊までを方向づけるという。

29期生の枚本 (2008) の卒業論文は、この初期分化理論を踏まえつつ、個人差要因として社会的スキルの差異を、大学生の男性113名と女性142名を対象に検討している。すなわち、関係初期における相互の認知が、現時点での関係性をどの程度規定しているのかについて、菊池 (1988) による Kiss-18 と友人関係満足度との関連性の変化を検討している。kiss-18 の因子分析の結果得られた下位尺度である「関係開始スキル」、「関係維持スキル」、「問題解決スキル」の初期と現在の関係満足度との影響過程をパス解析により検討した。その結果、関係開始スキルが、現在の親密度と行動頻度を媒介して関係満足度に影響していることが明らかにされた。これは、調査対象者の対人関係期間を統制していない影響も考えられるが、初期分化現象を部分的に支持する結果といえる。

対人関係の研究の臨床的応用として、社会的スキルの欠如による対人不安 (social anxiety) の研究がある。対人不安とは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において個人的に評価される、評価されることが予想されることから生じる不安」(Schlenker & Lerry, 1982)、「他者からの詮索や注目、あるいは単なる他者の存在によって引き起こされる動揺や混乱」(Buss, 1980) と定義されている。

この対人不安の規定要因としては、文化的背景 (Zimbardo, 1977) や、生活史の初期における家族や仲間との相互作用を通じて形成されるところの否定的自己スキーマによる成長過程における対人関係の影響 (Young, 1986)、そして、社会的スキルが欠如した人は、他者からの肯定的反応を得にくく、その場に居合わせる他者にも齟齬感を与えることにより、自身の応答の不適切さへの認識が高まり、対人不安を生起させるとする社会的スキル

欠如仮説（Arkowitz, Hinton, Perl & Himadi, 1978）がある。

社会的スキルは冒頭でも述べたように包括的概念であり、その定義は、研究者や研究文脈によって一定ではないが、近年では、所与の目的を、他者と有意な相互作用を実行するための「行動」と「能力」の両者を含む「過程」と捉えられている（相川ら, 1993）。この過程的側面からの定義では、「社会的スキルとは、対人場面において、個人が相手の反応を解釈し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制したうえで対人反応を実行するまでの循環的な過程」（相川, 2000）とされている。

社会的不安を軽減・解消するための視点として、社会的スキル欠如仮説は、上記の定義からも、具体的な解決への介入を想定しやすく、有用である。具体的には、「多様な対人場面において、他者との間で肯定的な相互作用を展開するために有用な言動を、学習の原理と技法を適用することで体系的にトレーニングできる。」（相川, 1996）。また、これらのトレーニングは、欠如が明らかなものに行われる治療的トレーニングと、適応上必要な社会的スキルを事前に獲得するために行われる予防的トレーニングに分けられ、職場をはじめとし教育現場等の多様な場面で効果的なトレーニングプログラムが開発され実施されている。

20期生の野崎（1999）の卒業論文は、男性97名と女性97名の大学生を対象として、林・小川（1981）による対人不安意識尺度と、柏原（1998）の社会的スキル尺度との相関により、対人不安と多様な状況における社会的スキルの関連性を検討している。社会的スキル尺度の因子分析の結果得られた8つの下位尺度のうち、「他者との関連を円滑に進める」、「状況に応じた行動をする」、「相手に応じた行動をする」、「事態を把握しまるく収める」といったスキルは、男女に関係なく社会的不安と関連していることが報告されている。女性にのみ有意な相関がみられたスキルとして、「状況に応じた行動をする」と「自分の意見を主張する」といったスキルが報告されている。

性差について、男性では、「ものごとを良い方向に進める」、「他者との関係を円滑に進める」、「自分の意見を主張する」といった3つの下位尺度と対人不安が関連しているのに対して、女性では、8つの下位尺度のうち、「相手に応じた行動をする」、「他者の感情を害しない」といったスキルを除く6つの下位尺度が、対人不安と関連することを報告している。また、家族の社交性と社会的スキルの自己評価に有意な相関があることも併せて報告している。

これら2つの卒業研究は、対人関係における社会的スキルの果たす役割を検討した研究であるが、対人関係にテーマ分類された論文の中で、他に11編（72編中）が社会的スキル

をテーマに含んでおり、テーマには含まれてはいないものの、卒業研究において社会的スキルを変数として扱っている研究は28編を数える。これは、社会的スキルの包括性が、多様な対人関係を検討する際に注目されることを示唆しているといえよう。また、72編中75%にあたる54編は、臨床的関心をもつ研究であり、自らの日常の対人関係の理解と問題の解決に向けた、知の実化を実現しようとする指向性の高さを示しているといえよう。

攻撃行動

攻撃行動に関する研究は、なぜ攻撃をするのかという「原因」に焦点をあてた研究と、攻撃することによって何が生じるのかという「結果」を扱う研究に大別することができるが、数としては前者が圧倒的に多い。ここでも、攻撃の原因を探った卒業論文を2つ紹介する。

怒りを伴う攻撃行動に深く関わる心理的プロセスの一つとして、責任帰属が挙げられる。責任帰属とは、個人が被害を受けたとき、加害者の行動の原因を推測することをいう。Rule & Ferguson (1984) は、責任帰属の三次元モデルを提唱しているが、このモデルは、「意図性」、「動機の正当性」、「制御可能性」という3つの認知要素からなる階層モデルである。「意図性」とは、被害状況が加害者によって故意に作り出されたものかどうかである。「動機の正当性」とは、加害動機が被害者にとって納得できるものかどうかである。一般に、利己的、内発的な加害動機（「自分を強く見せたい」や「人を傷つけるのが楽しい」など）は不当な動機とみなされやすく、利他的、外発的な加害動機（「社会秩序を守るために」や「上司からの命令で」など）は正当な動機とみなされやすい。さらに、「制御可能性」とは、加害者が、自分の行為がもたらす結果を回避できたかどうかであり、うっかりミスや怠慢による被害発生は制御可能とみなされ、偶然の事故などによる被害は制御不能とみなされやすい。これらの次元の組み合わせによって、加害行為は(1)意図・不当、(2)意図・正当、(3)非意図・可能、(4)非意図・不能の4カテゴリーに分けられるが、(1)(3)においては、責任性を高く評価されるので報復や制裁としての怒りを伴う攻撃行動が生じやすく、(2)(4)においては、生じにくいことが指摘されている。

23期生の山田（2002）の卒業論文は、この理論を踏まえつつ、相手との関係性という要因も加えた質問紙実験である。同じ被害が同じ原因で生じても、加害者とのそれまでの関係性によっては、責任帰属や、それに基づく怒りと攻撃行動に差がみられると予想される。そこで、この研究では、原因情報の差異と、被害者と加害者の関係性が、怒りと攻撃行動に及ぼす影響が検討された。関係性についての主な仮説は、以下の通りであった。仮説1)

被害を受けても、加害者が好意を寄せる人物である場合は、相手の立場に共感しやすいために、加害者に対する怒りは弱く、また、今後も関係を維持したいという動機が高いために、攻撃行動は抑制されやすいだろう。仮説2) しかし、加害者が嫌悪感を抱く人物である場合は、相手に共感しにくいいため、加害者に対する怒りは強く、また、関係維持動機も低いために、攻撃が表出されやすいだろう。この仮説をもとに、共同でのアルバイト作業や、レポート課題の作成状況における被害場面を描いた質問紙を用意し、対象者に回答を求めた。その結果、当初の予測通り、同一の被害が同一の原因によって生じた場合でも、挑発者が嫌いな人物である場合には、好きな人物である場合よりも、相手に責任を帰属しやすいため、怒りを感じやすく、攻撃的に反応しやすいことが明らかとなった。

次に、近年、怒りや攻撃性との関連が指摘されている個人特性としての、自己愛傾向に関する研究を紹介する。自己愛傾向とは、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという欲求によって特徴づけられる（小塩，1998）。自己愛傾向がなぜ怒りや攻撃と関連するかというと、それは怒りを表出する正当性を過度に高く評価するためと考えられる。自己愛傾向が正当性評価に及ぼす影響には、直接的な影響と、間接的な影響の2つが考えられる。まず、直接的な影響は、高自己愛傾向者に特有の自分自身を特別視する傾向が、怒りの表出に対する評価にも表れるというものである。怒りを他者に表出することは一般的には敬遠されるものであるが、高自己愛傾向者は「自分は特別な存在だから何をしてもよい」という尊大さによって、怒りの表出を正当だと感じやすい可能性が考えられる。次に、間接的な影響とは、自己愛傾向の高さが被害状況の認知に影響を及ぼし、結果的に正当性評価を高めるというものである。Baumeister, Smart, & Boden (1996) によると、自己愛傾向の高い個人は、自己評価が非常に高いにもかかわらず、それを支える明確な理由や根拠がないという特徴がある。そのため、ささいな出来事が自尊感情を低下させる原因となり、自我への脅威を感じやすいといわれている。つまり、高自己愛傾向者は相手から高く評価してもらえることを前提としているので、普通の人なら気にしないような行動にも過敏に反応してしまい、被害や責任を大きく認知しやすいことが予測される。その結果、感じる怒りも強くなり、怒りの表出を正当化しやすくなる。阿部・高木（2006）では、こうした直接、間接の2つの影響プロセスの存在が確認された。

25期生の伊藤（2004）の卒業論文では、この自己愛傾向が怒りの表出方法に及ぼす影響に着目している。「優越感・有能感」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性」という自己愛傾向の3側面それぞれの高低によって、怒りの表出方法が異なるのではないかと、また受けた被

害や相手の意図性の程度によっても、表出される怒りが異なると仮説して、質問紙実験を行った。ここでは、共同でのアルバイト作業や待ち合わせの際の被害状況が、場面想定法の題材として用いられた。その結果、注目・賞賛欲求高群は、注目・賞賛欲求低群よりも感情的攻撃や理性的説得をおこないやすく、自己主張性高群は、自己主張性低群よりも意図的な場面で感情的攻撃をおこないやすく、被害の大きい場面で感情的攻撃や嫌味をおこないやすいなど、自己愛の各側面が、それぞれ場面に応じて異なる影響力を持つことが示された。

これらの2つの卒業研究は攻撃行動そのものを扱った研究であるが、攻撃行動にテーマ分類された論文の中には、いじめに関する研究も多く含まれており（53編中15編）、このテーマに関する社会的・個人的な関心の高さがうかがわれる。

自己

自己に関する卒業論文のテーマとして多いものの一つに、自尊感情が挙げられる。自尊感情尺度はRosenberg（1965）によるものが有名であり、卒業論文では山本・松井・山成（1982）による邦訳版がよく用いられている。この自尊感情を中心として、精神的健康、対人不安、抑うつ感情などとの関連が検討されている。

そのうちの一つとして、ここでは27期生の今村（2006）の卒業論文を紹介する。今村（2006）は、自己概念と自尊感情が、対人恐怖心性に対してどのような影響を及ぼすかについて検討を行った。対人恐怖心性とは、一般の健常者にもみられる、対人恐怖の傾向である人見知りや過度の気遣い、対人緊張などの心理的な傾向のことをいう（堀井・小川、1996）。これまで、現実自己と理想自己との乖離と適応との関連を扱った研究が多くなされているが、この研究では理想と現実の差の大きさだけでなく、現実の自分をどれほど受け入れ、認められているかということも重視し、自己概念の乖離と自尊感情の高さから、対人恐怖心性への影響を検討した。

まず、自己像を「発信源」（「自分か他者か」）、「時点」（「現実か理想か」）の2軸で捉え、4つの自己像を用い、現実自己とその他の自己像との乖離から考える。研究の目的は、第一に、対人恐怖心性は自己概念のどの側面の差異と関係があるのかを調べ、第二に、「自己像の乖離」と「自尊感情」が対人恐怖心性に与える影響を、第三に、対人場面における評価・緊張の可能性の有無によって、緊張行動に影響する対人恐怖心性の側面に違いがあるのかを検討することである。仮説は以下の通りである。仮説 1) 自尊感情が高い人より、低い人のほうが対人恐怖心性は高い。仮説 2-1) 各自己と現実自己の自己概念が相対的に

一致している人より、各自己のほうが高い方向で不一致である人のほうが、対人恐怖心性は高い。仮説 2-2) 各自己と現実自己の自己概念が相対的に一致している人より、各自己のほうが高い方向で不一致である人のほうが、対人恐怖心性は高い。仮説 3) 各自己と現実自己の自己概念の乖離が小さい人でも、自尊感情が低ければ、自尊感情が高い人よりも、対人恐怖心性は高い。

大学生281名を対象に質問紙調査を行った結果、ほとんどの場合に、自尊感情と自己像の差異の交互作用はみられなかったが、それぞれの主効果はみられ、自尊感情と自己像の乖離はそれぞれに対人恐怖心性に影響を与えていることが分かった。また、自尊感情の主効果がすべての場合でみられたことより、対人恐怖心性を低減させるためには、自尊感情を高めることが有効な手段の一つであるといえる。そうなれば現実自己が高まる可能性が考えられ、自ずと理想との乖離を縮めることが可能となり、二重の効果で対人恐怖心性が低減することが示唆された。

また、自己に関する卒業研究としては、自己高揚と自己卑下を扱った研究も多いが、その中で精神的健康との関連から、ポジティブ・イリュージョンと呼ばれる現象について注目した、25期生の杉内（2004）の卒業論文を紹介する。

ポジティブ・イリュージョンは、「実際に存在するもの・ことを、自分に都合よく解釈したり想像したりする精神的イメージや概念」と定義され、自己高揚動機に基づく認知バイアスとして理解されている（外山，2009）。この傾向は、精神的健康や低抑うつ傾向、ストレス反応の低減と関連していることが示されている（Taylor & Brown, 1988；外山・桜井，2000；外山，2006）

この研究の目的は、自己高揚傾向が高い個人のネガティブ経験後の自己評価を検討することである。そこで、青年期における一般的なネガティブ事象として、失恋を取り上げ、失恋状況下における自己注目とその後の自己評価（充実感・自己受容）に着目することで、自己高揚傾向が高い個人の認知的特徴を検討した。

具体的には、自己認知尺度（外山・桜井，2000）でポジティブ・イリュージョンの傾向を測定したのち、半数の対象者には失恋したときのことを想定してもらい、具体的な記述を求めた（自己注目の操作）。その後、充実感尺度（大野，1984）、自己受容尺度（沢崎，1993）への回答を求めた。残り半数の対象者にはそのような想定はさせずに、同じ尺度に回答を求めた。

その結果、自己高揚傾向の高低による主効果が確認され、自己高揚傾向が高い個人は一般的に充実感、自己受容度が高く、これらのことが精神的健康の高さにも結びついている

と考えられる。その一方で、自己受容度のうちの「充実・生きがい」因子では、自己高揚傾向と自己注目の間に交互作用がみられ、ネガティブ経験の想定による自己注目が生じている場合には、自己高揚傾向の高低による差がみられないことが明らかとなった。これは、自己高揚傾向が高い個人の全般的な自己肯定感が、自己注目の欠如から生じている可能性を示唆するものといえる。

自己に関するテーマ分類でこの他に多いものとしては、自己開示（43編中9編）が挙げられる。

被服行動

被服行動に関する社会心理学的研究は、被服が果たす「社会・心理的機能」に着目し、被服行動の生起過程とそれに影響を及ぼす個人的要因、人間関係などの社会的要因、社会・文化の要因を解明すると共に、被服行動が個人や社会に及ぼす影響・効果を明らかにしようとしてここ20年間に着実に発展してきた（高木，2002）。

高木（1996）は、Kaiser（1985）を参考にして、被服行動には、①自分自身を確認し、強め、あるいは変えるという「自己の確認・強化・変革」機能、②他者に何かを伝えるという「情報伝達」機能、③他者との行為のやりとりを規定するという「社会的相互作用の促進・抑制」機能の3つの社会・心理的機能があると指摘している。

これらの社会・心理的機能は、大きな研究枠組みとなり、被服行動に関する社会心理学的研究を刺激し、種々の社会的行動に関する従来の心理学や社会心理学の知見とも絡み合い、さまざまなアプローチの中で、多くの有益な知見をもたらしてきている。

それでは、被服行動の社会・心理的機能の枠組みに基づき、3編の卒業論文を紹介する。

まず、自己の確認・強化・変革機能に関係して、30期生の談（2009）は、自己受容と他者受容が被服による自己呈示欲求に及ぼす影響について検討している。自己受容と他者受容がともに高い者は、アイデンティティの確立度が高いことから、アイデンティティを被服により呈示しようとする欲求が自己受容と他者受容によって規定されるだろうと仮説をたて、大学生308名（男性142名、女性166名、平均年齢20.19歳）を対象に質問紙調査を行った。その結果、自己受容と他者受容はアイデンティティの確立に正の影響を及ぼし、アイデンティティの確立と自己イメージの明確さが有意傾向で関連することが明らかになった。しかし、被服による自己呈示欲求は、自己受容から正の影響を受けているが、他者受容からは負の影響を受けていることが明らかになった。このことは、自己を高く受け入れているが、他者を受け入れられていない場合、被服によって自己を表現して他者に自己を

呈示したいという欲求が喚起されることを示唆している。

つぎに、情報伝達機能に関係して、29期生の中川（2008）は、社会的スキルが被服による印象管理に及ぼす影響について検討している。ネットワーク調整スキルが高い者ほど、良好な対人関係を構築しようとすることから、自己を良く見せようと被服による印象管理を意識するようになるだろうと考え、ネットワーク調整スキルが高い者ほど被服による印象管理意識が高くなるという仮説をたて、女子大学生288名（平均年齢20.18歳）を対象に質問紙調査を行った。その結果、まず、被服による印象管理意識が3つの因子、すなわち、被服が自分の振る舞いや他者に影響を及ぼすことを意識する『被服効果追求』因子、おしゃれな服を着ることを重視する『ファッション志向』因子、他者からの好感度を重視する『他者志向』因子から構成されていることを見だし、その上で、ネットワーク調整スキルが被服による印象管理の『被服効果追求』と『ファッション志向』の下位意識に影響を及ぼすことを明らかにした。このことは、今後親しくする相手かどうかを見極める能力が高い者ほど、被服が対人関係に影響を及ぼすことを意識して、コーディネートに気を使い、おしゃれな服を着用しようとすることを示唆している。

最後に、社会的相互作用の促進・抑制機能に関係して、21期生の市川（2000）は、服装の類似が他者への魅力度に及ぼす影響について検討している。対人魅力における類似性－好意効果に着目した今までの要請・応諾行動についての現場実験研究では、実験協力者が実験者の服装に対して本当に類似性を感じたのかどうかはわかりにくかった。むしろ、実験協力者は、実験者の服装から、実験者の社会に対する態度や考えを読みとり、そこに類似性を見いだしたのではないかと考え、着装規範意識に焦点をあて、質問紙調査という形式で、より明確な服装の類似からの類似性－好意効果を検討した。具体的には、実験協力者と刺激人物（写真による提示）の着装規範意識の差を類似度として、その類似度が高いと写真の人物に対して魅力を感じるだろうという仮説をたて、大学生192名（男性91名、女性101名、平均年齢20.85歳）を対象に質問紙調査を行った。その結果、仮説は支持されなかったが、着装規範意識が高い者は、規範逸脱的服装人物の着装規範意識がどうであれ、規範逸脱的服装の人物に対して抱く好意度が低く、逆に、着装規範意識の低い者は、好意度が高いことが明らかになった。また、自己の着装規範意識度の高低とは関係なく、規範同調的な服装の人物に対して抱く好意度は高いことが明らかになった。このことは、規範同調的服装の人物については、その人の着装規範意識が高いと考え、好意度が高くなることを示唆している。

3つの社会・心理的機能を枠組みにして卒業論文を紹介してきたが、学部卒業後、中川

(中川・高木2009a; 2010) は、談(2009)のデータを再分析して、自己受容と他者受容に基づいてアイデンティティが確立された後、自己の現実のイメージや理想のイメージが明確になると、それを被服によって呈示したいという自己呈示欲求が喚起されるという内的過程を見いだした。また、その過程を男女間で比較すると、男性においては、アイデンティティの確立後に自己の現実イメージや理想イメージを明確にして被服による自己呈示欲求が喚起されること、女性においては、自己受容が低いことが被服による自己呈示欲求を喚起させることを明らかにしている。

また、中川(2009b)は、自らの卒業研究のデータを再分析し、知人と会う時には、ネットワーク調整スキルに規定された『被服効果追求』と『ファッション志向』の2つの下位意識が被服選択に影響を及ぼすが、親友と会う時には、『ファッション志向』の下位意識のみが影響を及ぼすことを見いだしている。すなわち、親密度の高低により、被服選択に影響を及ぼす意識が異なるということである。知人と会うときは、外見がその後の関係に影響を及ぼすことを考える意識とおしゃれな服を着るという意識から被服選択を行っているが、親友と会う時は、おしゃれな服を着てファッションを楽しむとする意識によって被服を選択していると考えられる。

そして、牛田(2000)は、仮説が支持されなかった市川(2000)の研究に追加調査を行い、女子大学生192名(平均年齢:20.08歳)のデータを分析し、女子大学生においては、規範同調的人物に対する方が、規範逸脱的人物に対するよりも、抱く好意度は高いが、逸脱的な規範意識を持つ者は、規範逸脱的な服装の人物に対して好意を抱く傾向にあることを明らかにしている。

高木(1998)は、社会心理学の立場から、認知的モデル(S-[O]、刺激—生活体)、行動的モデル([O]-R、生活体—反応)、生物—意志的モデル(S-R、刺激—反応)、象徴的モデル(S-[O]-R、刺激—生活体—反応)の4つの社会・心理学モデルに基づく被服社会心理学研究のパラダイムを提案している。

さらに、高木(2001)は、特定の要因に限定した一時的で人工的な研究状況ではなく、時間的な連続性をもった日常の生活状況において、多様な社会的要因によって複雑に規定されている被服行動を文脈的パースペクティブから捉えて研究することの必要性を提案した。衣服の意味は、外見のなかに埋め込まれているので、外見が観察される社会的文脈、あるいは一層大きな文化的、歴史的な文脈のなかで、外見に応じて変化すると指摘している。そして、外見の意味とその変化を理解するためには、文脈的パースペクティブを内包する3つの理論的パースペクティブ、すなわち、心理学からの認知的パースペクティブ、社会

学からの象徴的相互作用理論パースペクティブ、人文科学や社会科学における多様な学問分野からの文化的パースペクティブから情報を引き出す必要があると提言している。

要するに、高木は、被服行動の対人社会心理学研究に、包括的な理論や研究枠組みの必要性、多様なアプローチや研究手法の多角的で柔軟な援用を提案し続けているのである。

現代の被服行動においては、生理的機能に加えて、心理的・社会的機能が非常に重要になっていることから、被服が果たす社会・心理的機能に着目して研究を行うことが必要である。そして、今後は従来の静的・理論的な研究で得られた知識・情報を有効に活用して、個人の幸せや社会の安定・発展を目指した動的・実践的研究を行うことがますます必要になってくるであろう。そのために、個々の研究は、包括的な理論構築をめざして、多様なアプローチや方法を採用して行うべきである。そして、個人の幸せや社会の安定・発展を目指した場合、被服や外見の研究は「精神的健康の維持・促進」やそれを目指した社会的場面での応用を一層重視して進められる必要があるだろう。

マスコミ・社会文化現象

このテーマは非常に多岐にわたるため、ここではファン心理に範囲を限定して論じる。ファン心理に関する先行研究は、美空ひばりや吉永小百合、山口百恵、松田聖子といった特定のスターを時代背景と共に読み解いたり（小倉，1989；市川，2002）、アイドル論やポップカルチャー、スポーツファンなど、社会学や文化論の文脈で議論されることが多かった（稲増，1989；小川，1988；1993；杉本，1997）。心理学の分野では、「阪神タイガースのファン気質に関する研究（1）」（広沢・田中，1986）、「阪神フィーバー現象の分析」（広沢，1989）、「ユーミン現象」（中村，1994）、「小田和正ファンの心理」（上野・渡辺，1994）、「タカラヅカファン」（上瀬，1994）、「大相撲ブーム」（上瀬・亀山，1994）などがある。しかし、いずれの先行研究も、「阪神タイガース」や「松田聖子」といった特定の対象に特化したケーススタディであり、対象に固有の特徴や現象を含んでいるため、得られた知見は当該のケースに限定される。

23期生の今井（2002）は、特定のケースを超えた、ファン心理全体の一般的な構造解明を目的として、緻密な調査を行っている。まず、予備調査として自由記述形式で好きなミュージシャンやアーティストについて回答を求め、ファン心理の全体像を質的に把握している。ファン心理は、大別して「作品の評価」、「本人への好意」、「流行意識」で構成されており、「本人への好意」はさらに「尊敬・憧れ」と「疑似恋愛感情」の下位側面を持っていた。

予備調査の結果に基づいて大学生549名（男性254名、女性295名、平均年齢19.7歳）を対象に大規模な質問紙調査を行い、ファン心理が以下の8側面から構成されていることを見出した。第1に、仕事の結果としての楽曲・演技・プレー・書籍などの作品を評価する『作品の評価』、第2に、異性の相手に強い依存・恋愛・嫉妬・奉仕を示す『疑似恋愛感情』、第3に、作品よりも本人、特に外見を重視する『外見的魅力』、第4に、自分との共通点を見出したり、自分を重ね合わせたりする『同一視・類似性』、第5に、ファン同士の交流を楽しむ『ファン・コミュニケーション』、第6に、『流行への同調』、第7に、本人に憧れ、人生の手本とする『尊敬・憧れ』、第8に、メジャーになって大衆に消費されることを嫌う『流行への反発・独占』である。尺度得点の平均値から、ファン心理の主軸をなしているのは『作品の評価』と『尊敬・憧れ』の側面であることが明らかになった。一方、『疑似恋愛感情』や『流行への同調』や『流行への反発・独占』の側面の得点は低く、ファン自身は意識していないか、あるいは一部の層に特徴的な側面と考えられる。

今井論文のデータを再分析した小城（2002；2004；2005；2006）は、ファン心理を職業別に比較し、ミュージシャンやスポーツ選手においては『作品の評価』や『尊敬・憧れ』の側面が特徴的であること、一方、俳優やアイドルにおいては『疑似恋愛感情』や『外見的魅力』の側面が特徴的であることを見出している。これらの結果から、ミュージシャンやスポーツ選手は、人生の手本として尊敬し、仕事を評価する対象であるが、俳優やアイドルは、演技力や歌唱力よりも、外見の美しさを愛で、疑似恋愛の対象として価値があると考えられる。このことは、従来のアイドル論や、スポーツファンの研究知見とも整合的であるが、同一の尺度を用いて統計的に比較した点で意義は大きい。

今井論文以降、学界においても同様の視点に立ったファン心理研究が散見されるようになった。たとえば、広沢・小城（2005）や小城・広沢（2005）ではプロ野球ファン、川上（2005）では思春期・青年期の発達課題からとらえたファン心理の構造、西川（2006）や今井・砂田・大木（2010）ではファン心理と精神的健康、吉田（2010）では自己愛とファン行動の関連、小城（2010）ではスキャンダルとファン心理、小城（印刷中）では海外ドラマのファン心理を取り上げており、ファン心理研究は大きく発展している。これらの研究は、遡れば、いずれも今井論文を基盤としており、一学部学生の研究であっても、学界を動かすインパクトを秘めていることを示している。

さらに、未公開の実習報告書や卒論のレベルでは、相当数の研究が行われていると推察される。大学によっては、実習報告書や卒論をHPなどで公開しているところがあるが、その中ではファン心理研究がたびたび散見される。アニメや漫画、ゲームのキャラクターと

いった架空の存在を対象としたファン心理は、サブカルチャー研究とも重なり、数多くの研究が行われている。また、韓流や若いアイドルのファンなど、中高年層のファン心理にも注目が集まっている。中高年層のファン心理は、青年期と異なり、ライフステージの個人差が複雑に関連しており、興味深いテーマである。また、特定の対象を積極的にバッシングするアンチファンの心理は、感情心理学の分野では未だ研究例の少ない対人嫌悪感情研究に貢献するものである。

今井論文では扱われておらず、以降の研究でもあまり着目されていないのは、ファン心理と個人特性との関連や、ファン心理のネガティブな側面である。卒論も含めて、数々の研究を概観すると、ファン心理には、何かを好きになることと、楽しみや幸福感を得るパターンと、極度の依存や攻撃、ストーキングなどのネガティブなパターンが見受けられる。後者の場合は、ファン心理がエスカレートしたというよりも、日常生活における主観的幸福感の薄さや孤独感を満たす代理行為として、ファン行動へ逃避した可能性がある。それ自体は根本的解決につながらないため、執拗に繰り返され、エスカレートしやすい。今後、こうした構造の解明が望まれる。

ファン心理研究は、特に学部学生の卒論で人気があり、取り扱いやすいテーマのようである。一見すると個人的な趣味の研究のように思われるが、その中には、素人だからこそ可能な、既存の体系を打ち破るような斬新なアイデアも数多い。今後、ファン心理研究がさまざまに発展し、学界の一翼を担うことが期待される。

まとめ

本稿で行った論文テーマの整理と分析は、対人社会心理学に興味を持つ学部学生が卒業研究のテーマを決定する際の参考資料としても、また、対人社会心理学の研究テーマの「流行」を知る手掛かりとしても活用できると考える。論文数の多かったテーマのうち、援助行動、攻撃行動、被服行動については、指導教官自身の研究テーマでもあり、このテーマで卒業論文を執筆するためにゼミを選んだ学生も多かったのではないだろうか。一方、自己、対人関係は、近年になってから急激に増加しているが、これは学界全体において自己高揚・自己卑下や、社会的スキルに関する研究テーマが隆盛し、論文数、学会発表数が増加してきた時期とも重なっている。そうした経緯をよく反映しているといえよう。マスコミ・社会文化現象については、このテーマ自体が非常に多岐にわたる内容を含むためと考えられる。

卒業論文は研究計画の一部に問題があったり、分析手法に不備がみられることもある。

しかし、非常にオリジナリティの高い研究を生むこともあり、また、たとえ先行研究と類似した研究であっても、結果の再現性も含めた知見の蓄積という点では重要である。さらに、高木ゼミでは指導教官のみならず、大学院生もTA（ティーチング・アシスタント）の立場から学部学生の研究計画への助言・指導を行っており、大学院生の教育的側面においても重要な価値を持っている。

なお、卒業論文の中でも、山田（2002）は阿部・高木（2003）および阿部（2004）、杉内（2004）は戸口・高木（2004）、中川（2008）は中川・高木（2009b）、談（2009）は中川・高木（2009a; 2010）、今井（2002）は小城（2002; 2004; 2005; 2006）といったように、再構成、再分析されて学会発表されたものや、学術論文となったものが数多くある。また、中川（2008）のように、大学院に進み、修士論文（中川, 2010）に発展しているものもある。また、今井（2002）のファン心理の卒業論文は、その分野における研究の新たな流れを生み出している。卒業論文は、学界全体で人気のある研究テーマの「すそ野」の役割として、データの蓄積に貢献する一方で、斬新なアイデアから新たな研究の流れを生み出したり、研究者としての道を進む第一歩の役割を果たすこともある。こうした観点に立てば、卒業論文は学界全体に対してきわめて重要な貢献を果たしており、指導にあたる者も、その責任を十分に心得なければならぬだろう。

引用文献

- 阿部晋吾（2004）. 加害者との関係性と原因情報が怒りと攻撃行動に及ぼす影響 関西大学大学院『人間科学』, 60, 117-127.
- 阿部晋吾・高木修（2003）. 加害者との関係性と原因情報が怒りと攻撃行動に及ぼす影響 日本心理学会第67回大会発表論文集, 962.
- 阿部晋吾・高木修（2006）. 自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響 心理学研究, 77, 170-176.
- 相川充（1996）. 社会的スキルという概念 相川充・津村俊充（編）社会的スキルと対人関係 誠信書房
- 相川充（2000）. 人付き合いの技術：社会的スキルの心理学 サイエンス社
- 相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖（1993）. 社会的スキルという概念について：社会的スキルの生起過程モデルの提唱 宮崎大学教育学部紀要 教育科学, 74, 1-16.
- Altman, I. & Taylor, D. A. (1973). *Social Penetration*, New York: Holst.
- Arkowitz, H., Hinton, R., Perl, J., & Himadi, W. (1978). Treatment strategies for dating anxiety based on real-life practice. *Counseling Psychologist*, 7, 41-46.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Berg, J. H. (1984). Development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 346-356.

- Berg, J. H., & Clark, M. S. (1986). Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent? In Derlega, V. J. & Winstead, B. A. (Eds.), *Friendship and social interaction*. Springer-Verlag, 101-128.
- Buss, A. H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- 談善穎 (2009). 青年が被服行動で行う自己呈示と自己受容・他者受容との関係性 関西大学社会学部卒業論文 (平成20年度卒) 未公刊
- 林洋一・小川捷之 (1981). 対人不安意識尺度構成の試み. 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29-46.
- Hays, R. B. (1984). The development and maintenance of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 75-98.
- Hays, R. B. (1985). A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Personality*, 48, 908-924.
- 日野加奈子 (2005). 援助成果経験が以後の援助要請行動に与える影響について: 援助コスト、援助効果及び援助成果志向性の要因の効果 関西大学社会学部卒業論文 (平成16年度卒) 未公刊
- 広沢俊宗 (1989). 阪神フィーバー現象の分析 ザ・心理学バザール 田中國夫 (編) 創元社 230-235.
- 広沢俊宗・田中國夫 (1986). 阪神タイガースのファン気質に関する研究 (1) 日本社会心理学会・日本グループダイナミクス学会合同大会論文集 35-36.
- 広沢俊宗・小城英子 (2005). プロ野球ファンの研究 I : 阪神ファンと巨人ファンの比較 関西国際大学地域研究所 研究叢書 地域からの発信, 3-18.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- 市川孝一 (2002). 人気者の社会心理史 学陽書房
- 市川隆史 (2000). 服装の類似が他者への魅力度に及ぼす影響について 関西大学社会学部卒業論文 (平成11年度卒) 未公刊
- 今井有里紗・砂田純子・大木桃代 (2010). ファン心理と心理的健康に関する検討 生活科学研究 32, 67-79.
- 今井あゆみ (2002). ファン心理のメカニズム: ファン心理の構造と、ファン行動との関連の研究 関西大学社会学部卒業論文 (平成13年度卒) 未公刊
- 今村恵子 (2006). 自己概念のズレ及び自尊感情が対人恐怖心性に及ぼす影響: 現実自己と理想自己・社会的自己・他者理想自己のズレから 関西大学社会学部卒業論文 (平成17年度卒) 未公刊
- 稲増龍夫 (1989). アイドル工学 筑摩書房
- 伊藤佳余子 (2004). 自己愛傾向による怒りの制御と表出の研究 関西大学社会学部卒業論文 (平成15年度卒) 未公刊
- Kaiser, S. B. (1990). *The social psychology of clothing: Symbolic appearance in context*. New York: Macmillan Publishing Company.
- 上瀬由美子 (1994). タカラヅカファン ファンとブームの社会心理 松井豊 (編) サイエンス社 53-70.
- 上瀬由美子・亀山尚子 (1994). 大相撲ブーム ファンとブームの社会心理 松井豊 (編) サイエンス社 73-90.
- 柏原匡裕 (1988). 社会的スキルの獲得を規定する要因とその獲得時期について 関西大学社会学部修士論文 未公刊
- 川上桜子 (2005). ファン心理の構造——思春期・青年期の発達課題との関連から—— 東京女子大学心理学紀要, 1, 43-55.
- Kerckhoff, A. C. & Davis, K. E. (1962). Value consensus and need complementarity in mate selection. *American Sociological Review*, 27, 295-303.
- 小城英子 (2002). ファン心理に関する探索的研究 関西大学大学院『人間科学』, 57, 41-59.

- 小城英子 (2004). ファン心理の構造 (1) ファン心理とファン行動の分類 関西大学大学院『人間科学』, 61, 191-205.
- 小城英子 (2005). ファン心理の構造 (2) ファン対象の職業によるファン心理およびファン行動の比較 関西大学大学院『人間科学』, 62, 139-151.
- 小城英子 (2006). ファン心理の構造 (3) 性別によるファン心理・ファン行動の比較と、ファン層の分類 関西大学大学院『人間科学』, 64, 177-195.
- 小城英子 (印刷中) 海外ドラマのファン心理 聖心女子大学論叢 115
- 小城英子・広沢俊宗 (2005). プロ野球ファンの研究Ⅱ：ファン心理の球団別比較 関西国際大学 地域研究所 研究叢書 地域からの発信, 19-26.
- 小城英子・薊理津子・小野茜 (2010). スキャンダルとファン心理 聖心女子大学論叢, 114, 101-133.
- Leary, M. R. (1982). Social anxiety. In L. Wheeler (Ed.), *Review of personality and social psychology* (Vol. 3). Beverly Hills: Sage.
- Leary, M. R. (1983). Understanding social anxiety. Beverly Hills: Sage.
- Murstein, B. I. (1970). Stimulus-value-role: A theory of marital choice, *Journal of Marriage and the Family*, 32, 465-81.
- 中川由理 (2008). 被服行動における社会的スキルと印象管理についての研究：着装を規定するACTとネットワーク調整スキル 関西大学社会学部卒業論文 (平成19年度卒) 未公開
- 中川由理 (2010). 被服による印象管理スキルとしての被服選択行動とその選択過程の検討：職場の着装規範に適合する被服が着装者に対する印象評価等に及ぼす影響に着目して 関西大学大学院社会学研究科修士論文 (平成21年度修了) 未公開
- 中川由理・高木修 (2009a). 青年期におけるアイデンティティ確立と被服表現欲求の関係性 日本繊維製品消費学会2009年年次大会発表
- 中川由理・高木修 (2009b). 社会的スキルとしての規範適合的被服選択の過程に関する検討 日本社会心理学会第50回大会・日本グループダイナミクス学会第56回大会発表
- 中川由理・高木修 (2010). 青年が被服で自己表現しようとする欲求の喚起 繊維製品消費科学, 51, 51-54
- 中村紀子 (1994). ユーミン現象 ファンとブームの社会心理 松井豊 (編) サイエンス社 15-34.
- 西川千登世・上笹 恒 (2006). 音楽ファンのコンサート参加行動における精神健康度への影響 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 786-787.
- 野崎さおり (1999). 社会的スキルの欠如と対人不安との関連について 関西大学社会学部卒業論文 (平成10年度卒) 未公開
- 小川博司 (1988). 音楽する社会 勁草書房
- 小川博司 (1993). メディア時代の音楽と社会 音楽之友社
- 小倉千加子 (1989). 松田聖子論 飛鳥新社
- 大野久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究, 32, 100-108.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rule, B. G. & Ferguson, T. J. 1984 The relations among attribution, moral evaluation, anger, and aggression in children and adults. In A. Mummendey (Ed.), *Social psychology of aggression* (pp.143-156). New York: Springer-Verlag.
- 沢崎達夫 (1993). 自己受容に関する研究 (1) :新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, 26, 29-37.

- Schlenker, B. R. & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- 妹尾香織 (2001). 援助行動における援助者の心理的效果：研究の社会的背景と理論的枠組み 関西大学大学院『人間科学』, **55**, 181-194.
- 妹尾香織・高木修 (2001). 援助者に及ぼす援助行動経験の効果 (1) 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 346-347.
- 杉本厚夫 (1997). スポーツファンの社会学 世界思想社
- 枚本兼輔 (2008). 友人関係の親密化に関する研究：初期相互作用と社会スキルが友人関係に及ぼす影響 関西大学社会学部卒業論文 (平成19年度卒) 未公開
- 杉内智子 (2004). 新しい精神的健康観について：ポジティブ・イリュージョンの高低と自己分析の有無が精神的関係に与える影響 関西大学社会学部卒業論文 (平成15年度卒) 未公開
- 高木修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-21.
- 高木修 (1998). 人を助ける心：援助行動の社会心理学 セレクション社会心理学7 サイエンス社
- 高木修 (1998). 被服行動研究における社会心理学接近法 繊維製品消費科学, **39**, 11-17.
- 高木修 (2001). 21世紀に開かれた被服社会心理学 繊維製品消費科学, **42**, 63-64.
- 高木修 (2002). 被服の社会心理学的研究：特集号の刊行によせて 繊維製品消費科学, **43**, 10-11.
- 高木修・神山進 (監訳) 被服心理学研究会 (訳) (1994). 被服と身体装飾の社会心理学 (上・下巻) 北大路書房
- 高木修 (監修) 大坊郁夫・神山進 (編) (1996). 被服と化粧の社会心理学 北大路書房
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- 戸口愛泰・高木修 (2004). 失恋想定時における自己注目と自己高揚 日本社会心理学会第45回大会発表
- 外山美樹 (2006). ポジティブ・イリュージョンの功罪：小学生のストレス反応と攻撃行動の変化に着目して 教育心理学研究, **54**, 361-370.
- 外山美樹 (2009). 学業達成に影響を及ぼす認知的方略：防衛的悲観主義と方略的楽観主義 日本心理学会第73回大会発表論文集, 1026.
- 外山美樹・桜井茂男 (2000). 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, **48**, 454-461.
- 上野行良・渡辺麻子 (1994). 小田和正ファンの心理 ファンとブームの社会心理 松井豊 (編) サイエンス社 35-50.
- 牛田聡子 (2000). 女子学生における着装規範意識の類似が他者の魅力評価に及ぼす影響 日本社会心理学会第41回大会発表
- 山田昌幸 (2002). 対人関係と原因情報が欲求不満事態での怒りと攻撃行動に及ぼす影響 関西大学社会学部卒業論文 (平成13年度卒) 未公開
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 **30**, 64-68.
- 吉田未来 (2010). 自己愛傾向とファン行動との関連性について 北星学園大学大学院論集 **1**, 113-126.
- 吉岡花恵 (1994). 悩みの相談場面における相談相手の選択について 関西大学社会学部卒業論文 (平成5年度卒) 未公開
- Zimbardo, P. G. (1977). *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts : Addison-Wesley.